

ロマンス／徳永二男 ヴァイオリンリサイタルFOR VIP

徳永二男(ヴァイオリン) 前島園子(ピアノ)/全4曲(22'50")

side 1 side 2

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1. ロンド, K250(モーツァルト曲〜クライスラー編) 6'51" | 1. ロマンス第2番 作品50(ベートーヴェン曲) 8'14" |
| 2. ロマンス イ長調 作品94の2(シューマン曲〜クライスラー編) 4'37" | 2. 愛の悲しみ(クライスラー曲) 3'08" |

●プロフィール



徳永二男

徳永二男は、横須賀市生まれ、ヴァイオリニストであった父と鷺見三郎に師事してヴァイオリンを学ぶこととなりました。そして毎日学生コンクール小学校の部で第1位を獲得するなど早くからその才能を発揮した彼は、1962年に桐朋学園高校音楽科に入学し、小澤征爾や秋山和慶らの師として知られる名教授の斎藤秀雄のもとでさらに研鑽を重ねました。その後、1965年に第34回音楽コンクールに入賞を果たした彼は、早くもその翌年に東京交響楽団のコンサート・マスターに就任し、日本楽壇史上最年少のコンサート・マスターとして注目を集め、ソリストとしても精力的な活動を開始するまでに至っています。

しかし、さらに研鑽に意欲を燃やす徳永は1968年に文化庁海外派遣研修生としてベルリンに留学し、ミッシェル・シュヴァルベのもとで技を磨き、1974年には、第5回チャイコフスキー・コンクールでディプロマ賞を受賞しています。そして、この頃から海外でも華々しい演奏活動を行なうようになった彼は、ブルガリアやソヴィエト各地でリサイタルを開催したり協奏曲をオーケストラと協演したりして好評を博していますが、その優れた力量を広く認められることとなった彼は、1976年にNHK交響楽団のコンサート・マスターに就任しています。

それからの徳永は、NHK交響楽団のコンサート・マスターとして活躍を続けるだけに留まらず、ソロや室内楽の領域でも活発な演奏活動を行ない、現在の彼は、我が国で最も多忙なヴァイオリニストとなるまでも至っています。ちなみに、彼の使用楽器は、1716年製の銘器ストラディヴァリウスだということです。



前島園子

このアルバムで徳永二男と協演している前島園子は、桐朋学園高校音楽科と同大学に学び、岡林千枝子、井口愛子、斎藤秀雄らに師事したピアニストです。1969年に桐朋学園大学を首席で卒業した彼女は、その翌年にオーストリアに留学し、モーツァルト音楽大学に入学しました。そして、1973年に同大学を首席で卒業し最優秀賞をも得た彼女は、モーツァルト財団からリリー・レイマン・メダルを授与された他、ジュネーヴ国際コンクールやエット・レ・ポツォリ国際ピアノ・コンクールにも入賞を果たし、ヨーロッパ各地でソロや室内楽等に意欲的な活動を開始しています。なお、現在の彼女は、モーツァルト音楽大学の講師を務める傍ら、オーストリアを本拠としてヨーロッパ各地で活発な演奏活動をも続けています。





制作にあたって

VIPメイト会員の皆様、この度は会員の御継続をしていただき、誠にありがとうございます。

VIP45も今回で第9作目となりますが、過去、「逆進行レコード」
「220g世界最高重量レコード」、「マルチ・ダイレクト・カッティン
グ」等、数々のオーディオ的チャレンジをしてまいりました。

ところでCDの普及につれ、最近ではアナログ・ディ
スクの話題が乏しかったのですが、昨年12月末に、

K社より「180gスーパー・アナログ・ディ
スク」が10タイトル発売され、CD
化されたものより音が良いと評判
になっています。

そこでDAMといたしましては、
このところ最新技術の導入が
無かったアナログ・ディスク
に、世界で初めて、ガラス
原盤によるマスタリングに
チャレンジいたしました。

これは、CD、LD、VHDの
原盤をレーザー光線でカッティングする際に使用される
超精密研磨の8mm厚のガラス盤に、特別にラッカー（硝
化綿）を塗布し、従来の1mm厚のアルミ材のラッカー原
盤の代りとしたものです。

更に今回は、前回のDAM45で出来なかった、サーボ・
メカを使わずに、一定のピッチでカッティングする、シ
ングル・ピッチ・カッティングを採用し、プレスにあた
っては、200gと通常のDAM45より25%程、重量アップを
いたしました。

何分にも、世界初のガラス原盤・超重量レコードとあって、
最新・最高水準の設備をもってしても製造上の歩留りが悪く、
プレス枚数は500枚程度という極少量にならざるを得ません。そ
の分、この愛蔵家ナンバー入VIP45は、世界でもたった500枚強
という稀少価値のあるレコードといえるのではないかと思います。

ところで、内容については、'86冬の「マニアを追い越せ／大作戦」
で登場した「徳永二男●チゴイネル・ワイゼン76/45」(DOR0144-5)
に未収録の四曲を収めました。特にモーツァルトの「ロンド」は、
上記DAM45と同時発表のCDにも収録されていない、本VIPレ
コードだけのものです。

徳永二男氏は、NHK交響楽団の第一コンサートマスターを務め
られ、皆様もTV等で良く御存知のことと思いますが、日本を代表
する実力派ヴァイオリニストとして、ソロや室内楽活動も積極的
に行っているらしいです。伴奏の前島園子さんは、オーストリアの
モーツァルト音楽大学の講師の他、ヨーロッパを中心に活躍さ
れているピアニストです。

曲目については、徳永氏と相談の上、大変良く知られている名曲
ばかりを15曲、徳永氏の御希望もあり、響の豊かな、音の良いホール
として評判の洗足学園・前田ホールで、'86・8月28日・29日の両日
に渡って、アナログ録音とCD用のデジタル録音を行いました。15
曲70分を越える録音とあって、両日とも9時間以上のハード・スケ
ジュールでしたが、徳永氏の永年培われたプロとしての実力と、超
人的なスタミナ、そして前島さんの息のあった絶妙なサポートで素
晴らしい演奏を予定通り無事レコーディングすることができました。

おなじみの小品が、徳永氏の磨きぬかれたテクニックと洗練され
た美しい音で収録されています。

ところで、CDの普及につれて、残念なことにクラシックのアナ
ログ録音が、世界的に少なくなりつつあります。これはデジタル録
音がアナログ録音より「音」の点で優れているから、と巷間いわれ
ているようですが、むしろデジタル録音の方がCDを製作するため
には適しているという商業的な理由が大きいのではないかと考えられ
ます。そして同時発売のLP（最近ではこれも少なくなりました）にも、
そのデジタルマスターを使ってカッティングすることが多いのが現
状です。

そのような中で、DAMがオリジナル録音をする際、必ずアナロ
グとデジタルの両方で録音しているのは、現在のデジタル録音（16
ビット、44.1KHzサンプリング）より、アナログ録音の方が「音」
の点で総合的には優れていると判断しているからです。（最近、国内
M社が、20ビット、96KHzサンプリングのデジタル・マスター・レ
コーダーを開発するという発表をいたしました。これもプロの録
音現場サイドがデジタル録音のサウンド・クオリティをアップした
いという要望を出しているからでしょう。）

もっとも1/2インチ・76cm/secのアナログ録音では、テープの費用
だけでも、デジタルのビデオ・テープの4倍以上ですし、更にDAM
45用のアナログ編集と、CD用のデジタル編集との両方のため、2
倍の時間と費用が必要となります。しかしこれも、スーパー・アナ
ログ・ディスクとして出来る限り音質の向上をさせたいという、D
AMの制作ポリシーに他なりません。その優秀なアナログ録音を、
レコード化するプロセスを慎重に行わないと、情報をロスしてしま
い、プレスされたレコードが、マスター・テープとかけ離れた無残
な音になりがちです。そこで今回、カッティングにあたっては、録
音当日の1/2インチ・76cm/secのマザー・テープを鉄により若干の編
集作業をただで、ダビングや音の加工は一切しておりません。
又、録音に使用したテープ・レコーダーをそのままカッティング時
の再生送り出しにも使うというシンプルで理想的な形をとり、4曲
約23分を、ガラス原盤2面に、余裕をもってシングル・ピッチで、ノ
ン・イコライザー、ノン・リミッター、ハイレベル・カッティング
をいたしました。

その後、東芝EMI、御殿場工場の、最新・最高の設備とノウ
ハウが投入され、CDと同じ高純度のメッキ工程、充分時間をかけ
たプレス工程を経て、この世界初のガラス原盤によるVIP45が完
成した次第です。

前回のDAM45(DOR0144-5)と比べ、ガラス原盤の平滑性、メ
ッキ工程でのアルミとガラスによる膨張度の差による成型精度の大
幅アップ、真円度を著しく改善した200g高精度プレス等の効果から
か、リアルで瑞々しいサウンドが再生され、録音時の微小なバラン
スの差もハッキリわかります。

ただ、初めてのガラス原盤ということもあって、ガラスそのもの
の材質からくるカラー・レーションや、200g超重量・厚手プレスに
ともなうSN等、若干のバラツキは、今後の課題として、御諒解い
ただければ幸いです。

なお今回のアルバム作成にあたり、徳永二男氏、前島園子さん、
洗足学園、そして、大変なコストと時間、技術を要するガラス原盤
によるVIP45を製造していただいた東芝EMI(株)、ならびに関係
各位に心から厚くお礼申し上げます。

今後もDAMといたしましては、最高水準のスーパー・アナログ・
ディスクを開発し、VIP会員の皆様に少しでもお役にたつよう、
更に一層の努力をする所存ですので、今後とも皆様のご支援のほど、
よろしくお願い申し上げます。

ロマンス／徳永二男

ヴァイオリンリサイタル FOR VIP

徳永二男(ヴァイオリン) 前島園子(ピアノ) / 全4曲 (22'50")

side 1

1. ロンド, K250 (モーツァルト曲～クライスラー編) 6'51"
2. ロマンズ イ長調 作品94の2 (シューマン曲～クライスラー編) 4'37"

side 2

1. ロマンズ第2番 作品50 (ベートーヴェン曲) 8'14"
2. 愛の悲しみ (クライスラー曲) 3'08"





このアルバムのこと

ヴァイオリンという楽器は、さまざまな楽器のなかでもピアノと共に最も広く親しまれることとなっていますが、その魅力や持ち味は、ヴァイオリンの旋律楽器としての特性にその殆んど大部分が由来するものといえましょう。そして、多くの種類の旋律楽器のなかで王者としての位置を占めているヴァイオリンは、単に甘美な歌を歌い継ぐだけでなく、実にヴァラエティに富んだ表現力を誇る楽器といえますが、ヴァイオリンのその多彩で豊かな表現力は、古くから大作曲家たちを強く惹き付け、彼らに数多くの名作を生み出させることとなりました。

このアルバムには、数あるヴァイオリンのための名曲のなかでも特に魅力的で優れた作品といえるものが収録されていますが、以前から幅広く根強い人気を保ち続けている名作中の名作ばかりです。ここでは、誰の心をも捉えずにはおかない名旋律の数々だけでなく、スタッカート、ダブル・ストップ等のヴァイオリンの技巧を巧みに生かした華やかな名人芸などを心ゆくまで味わうことができますが、これこそは、ヴァイオリン音楽ならではの楽しみに他なりません。

そして、このアルバムのもう1つの魅力は徳永二男の力強くすがすがしい快演にあるといえましょう。我が国ヴァイオリン界のホープとして活躍を続ける徳永は、稀にみる卓越したテクニックと若々しくみずみずしい表現力をその持ち味としたヴァイオリニストですが、彼の説得力に溢れる名技は、ヴァイオリンの名曲の数々からその魅力を存分に引き出すまでにも至っています。そして、名曲の名演奏を収録したこのアルバムは、最新録音ならではの鮮やかな音質とも相俟って、きっとヴァイオリン音楽の醍醐味を堪能させてくれることとなるに違いありません。

このアルバムのこと 柴田龍一

魅力的な作品を、若々しく



曲目について

●モーツァルト：ロンド K.250

「ハフナー・セレナード」は、W.A.モーツァルト（1756～1791）が若き日に手掛けた大作として名高い1曲です。そして、この第4楽章のロンドは、名ヴァイオリニスト、クライスラーの編曲によってヴァイオリン曲として単独で普及することとなりましたが、快活にして典雅な美しさがきわ立つこのロンドは、天才モーツァルトならではの才気に富んだ珠玉の小品というにふさわしい名作です。

●シューマン：ロマンス イ長調 作品94の2

ロマン派音楽の推進者として知られるR.シューマン（1810～1856）は、1849年にオーボエのための3つのロマンスを作曲していますが、この作品は、さまざまな旋律楽器のためにも編曲されています。そして、ここに収録されたその第2番は、静かで清純な美しさが限らないロマンスで、そこには、いかにもシューマンらしい夢想的で激しい情熱とロマンがたっぷりに湛えられています。

●ベートーヴェン：ロマンス第2番 作品50

ロマンスとは、ロマンティックな性格を特色とした甘く優しい音楽のことです。そして、L.V.ベートーヴェン（1770～1827）は、その生涯にヴァイオリンのための2つのロマンスを書き残していますが、この第2番は、第1番と比較してより一層旋律線の美しさがきわ立っているロマンスで、さらにそこに息づく清冽な抒情もがたいへん印象深い魅力的な1曲です。

●クライスラー：愛の悲しみ

「愛の喜び」と共にクライスラーの代表作として親しまれているこの「愛の悲しみ」は、やはりウィーンの古い舞踏歌のスタイルによるワルツとなっています。そして、ここでは優美な面持ちのなかに、いかにも愛の悲しみを想わせるかのようなメランコリックな抒情がたっぷりに湛えられています。



新鮮に聴かせてくれる。



レコーディングレポート

8月28日。ここは足立学園前田ホール。

素敵な音楽に逢えるうれしさ半分、レポーターとしてのプレッシャー半分で、私、もうドキドキしています。

午前9時に機材の搬入が始まり、レコーディング準備に約2時間。

11時。徳永二男さん、前島園子さんがお見えになって、その20分後には早速リハーサルが始まりました。

テストにテストを重ね、何度も何度もピアノとマイクの位置を変えて……。これはヴァイオリンの自然な柔らかい音、暖い音を再現するためのセッティングです。

——この前田ホールは、今回、徳永さんご自身が特に望まれたホールだそうですか？

徳永「僕の所属しているN響がこのホールでこけら落としをしました。ここはいいんだよね。少し小さめだけど奥行き、幅、この箱形。音の反響を体で確かめられ、安心して演奏できる。クラシックのために造られたホールだしね。」

演奏中の表情とまったく違うんです。笑顔がとっても素敵



で……。第一印象もそうでした。陽によく灼けて、ヨットがよく似合いそうなスポーツマンタイプで。

そういえば、徳永さんはファンクラブをお持ちなんですよ。クラシック界ではあまり例がないんじゃないかしら。

活動のメインは会員のためのサロンコンサート。その他にも夕食会や誕生会。また、録音されたものを優先的に分けて

いらっしやるとか。コミュニケーションをとっても大切にしたいファンクラブの様です。徳永さんファンの方にはぜひおススメしたいですね。



3時間もの念入りなリハーサルを経て、ピアノとマイクのセッティングは完璧。さあ、本番の開始です。

ミキシングルームは静まりかえり、緊張感に空気はピンと張りつめたよう。そして、いきなり、美しく調和された音楽が広がって……。それが……何て言葉にすればいいんでしょう……ただ感激。泣きたくなっちゃうくらいに。心がきしむくらいに。押し寄せてくる感動で倒れそうです。五感で音を感じます。……なんて素敵。

レコーディングはというと、演奏者とスタッフ両者の納得ゆく音探し。求める音が録れるまでは絶対妥協



なんてしません。一曲あげるために、ステージとミキシングルームを何度も往復し、プレイバックされたものを聴き、細かいチェックを入れる演奏者とスタッフ。静かで張りつ

めた空気の中にもたいへんな熱気。

そんな録音の合間に伺ったお話です。

——お二人とも桐朋学園のご出身だそうですか。

お二人「そうそう。」

前島「あの頃は厳しい授業だったわね、実技重視で。」

——今は？

徳永「生徒が平均化され、ムラは無くなり、ツブは揃っているけれど、パーソナリティーが無くなってきてるよねえ。

僕は斎藤秀雄先生に意識的に育てていただいた。そういえば、いい指揮者というのは、いい音楽づくりをするよね、いろんな意味で。」

前島「そうね。音楽づくりって、一言でいえば“強さ”ね。それはたとえ亡くなっても残るものだし。」



レポーターの樋口さんは、いつもはイベントのコンパニオンやファッションショーの司会などで活躍されているお嬢さん。今回は、レコーディングという彼女の初めての体験を通して、若く、新鮮な目で演奏者のお二人を追っていただきました。

レコーディング・レポート 樋口美幸

ホットな感動体験でした。

——いい先生というのは、どういう先生ですか？

徳永「いい先生っていうのは生徒への要求度が高いね。だから生徒はそのレールの上に来るまでがすごく大変なんだ。」

——前島さんは？

前島「ええ、井口愛子先生に。言葉は厳しいけれど、やっぱりいい先生なのよね。」

——ところで、外国のいろんな方とも協演されていますが、特に印象に残っているもの、ありますか？

徳永「う〜ん。いろいろな印象はあるし、一言ではいえないよ。そうだなあ…、先年亡くなられたロヴロ・フォン・マタチッチという指揮者と協演した事があるんだけど、その時はもう随分お年を召されていて、ツアーの途中で松葉杖から車椅子に変わるくらい体力的にも大変だね。でも指揮棒を振る彼の意図はなぜか驚くほど伝わってくるんだ。スゴイよ。」

——徳永さんはN響のコンサートマスターでいらっしゃいますが、コンサートマスターってどんな事をなさるんですか？

徳永「弓の上げ下げの指示。そして指揮者とみんなのパイプ役だな。オーケストラって、指揮者がいて、一番前に弦楽器があって、木管、金管そしてパーカッションでしょ。そんな音の距離感を無くしてあげる役。信用で結ばれていなければならないね。」

——ご使用のヴァイオリンはストラディヴァリウス・バロン・オッペンハイマーですね。

徳永「別にストラディヴァリウスだから使っている訳じゃあないんだよ。ただ“もう少しいい楽器だとこの音はもっと綺麗に出るのに”というのが重なり重なり、行きつくところがストラディヴァリウス。表現力が豊かだし、自分の要求度に応えてくれる。健康な楽器だよな。」

——ヴァイオリンって、とってもデリケートな楽器だそうですが……。

徳永「そう。湿度、気圧に凄く敏感。ヴァイオリンで次の日のお天気がわかる程だよ。湿度が高いと、弓をおく高さ、魂柱（こんちゅう）も変わってくる。弓っていうのは馬の尻尾で出来てるんだけど、湿度のひどく高い時は、長さが2センチも変わっちゃうくらいだ。」

それにしても、本当に素敵な方々なんです。自分に厳しく人には優しいっていうのかしら……。言葉の端々にそんなものが感じられるんです。



さて、その後も録音は精力的に続けられ、演奏も凄い盛り上がりを見せてくれます。そして、丁寧に丁寧に、一曲ずつが仕上がってゆきます。

二日目。10時半には録音開始。前日からの盛り上がりはずうっと続いていて、とても順調に進みます。うわあ、昨日と同じ緊張感と熱気。“いいレコードを作りたい”という全員の気持ちが肌に伝わってきます。

私はただただ驚きっぱなし。だってそうですよね、今まで何気なく買っていたレコード、その制作が、こんなに大変だなんて思いもよらなかったのですから……。

それにしても皆さん、タフです。特に徳永さんは。「まる二日の録音、ペース配分を少し心配したけど、スタミナが持ったよ。適度な緊張感を持つ、納得できる録音だったな。」そう、後でにこやかにおっしゃっていましたが。



レコーディングを始めて何時間経ったのかしら。“時間の経過が早いのか遅いのかわからないな。”なんて思う頃、全曲が完成しました。

午後7時20分。最後のチェックをしている演奏者とスタッフ。まわりの空気は二日間の張りつめたものから穏やかなものへと、ゆっくり変わってゆきます。終了。ホッとした様な、もっと聴きたいなあと残念なような……。

——前島さん、お疲れ様でした。このレコーディングを終えてのご感想を。

前島「和気あいあいとして、いい雰囲気ですりやすかったですね。」

——世界を股にかけて大変なご活躍ですが、ピアノはヴァイオリンみたいに持ち運び出来ませんし、その時その時で良かったり悪かったりしませんか？

前島「以前は、このピアノは弾きやすいとか弾きにくいとか思っていたんですが、今は段々と合わせる事が出来るようになりました。」

——じゃ、技術の他にもそういう事が要求されるという事ですか？

前島「いいえ、それが技術なんです。」

——オーストリアを始めとした海外で演奏する時と、日本での時と、何か違いみたいなものはありますか？

前島「そうね。観客との会話かしら。演奏する事によって話しかけて、聴くことによってお客様も応えてくれて。その会話が楽しいですね。ただ、日本ではまだクラシック音楽の歴史が浅いせいか、その会話があまり……。もっともっと会話したいって思います。」

——数日前に日本にいらっしゃったばかりですが、失礼ですけど時差で大変じゃ……。

前島「今年はまだ4〜5回往復しているの、時差ボケボケです。(笑) 10月にザルツブルクへ帰ったら、今年はまだもうゆっくりする予定です。」

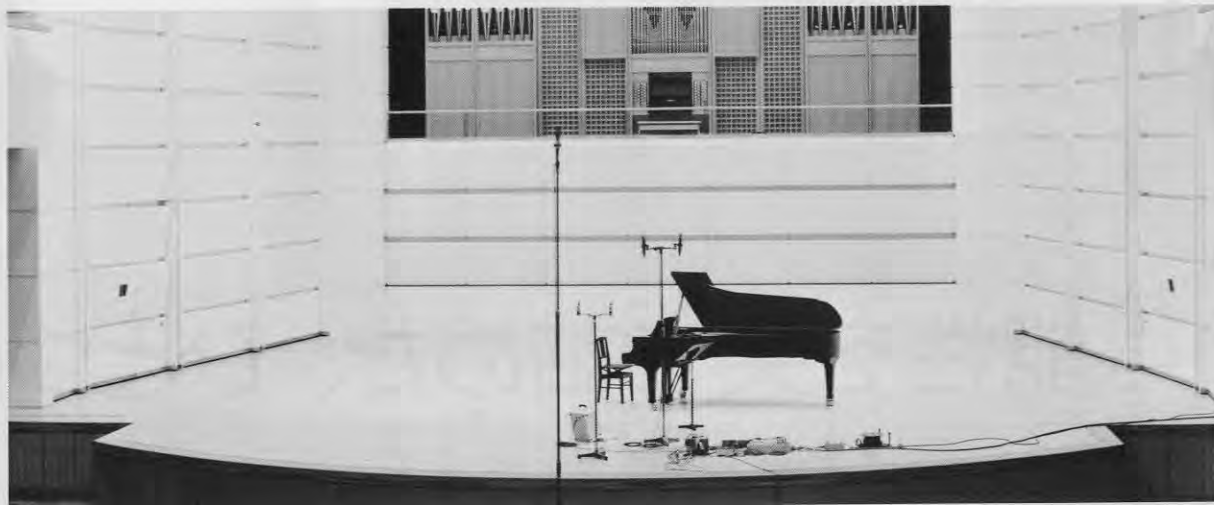
——個人的ですが、二日間、耳に体に気持ちよくって。素晴らしい音楽が聴けて、とっても嬉しくって。

前島「そういってもらうと嬉しいですね。結局そうなんです。好き、嫌い、耳に気持ち良いかどうか——なんです。」

前島さんて、女性らしい優しさに溢れる素晴らしい方です。音楽を離れると、著名なピアニストというより、山の手のお花の先生というイメージ。同じ女性として憧れます。私もいつかは、こんな素敵な女性になりたいって、心から思います。

スポットに照らされたステージでは、最後のジャケット写真の撮影が行なわれています。それを見ながら、この二日間の貴重な体験をかみしめます。

想像していたものをはるかに越える、素晴らしい音楽のディーナーでした。ただ、それを真から味わうだけの舌を持っていない自分を、少し悔しく感じます。そして、このレコードを手に入る方には、この一枚のレコードの重みを、ぜひ感じて頂きたいって、今、心から思っています。



音楽パッケージもこのところ、DATをはじめとし、CD-V、CD-I等、次々に新商品の開発が具現化し、今後ますます多品種化の傾向を呈し、誠に興味ある、期待の大きいものがあります。

私共制作サイドとしても、新商品化への対応は厳しく、従来と違った、まったく新しいコンセプトが必要とされるでしょうし、又音楽ソフトに対するアプローチの仕方も更に多様化し、より以上に個性化すると考えます。

この様な背景の中で、今やアナログディスクは完全にコンパクトディスクにその主流の座を奪われた感があります。しかもこんなに短期間で100年以上続いたアナログディスクと世代交替したCDの優位性は充分に理解出来ますが、「30cmLP」の音を良くしたい！ まだまだ良くなるはずだ！とアナログディスクに拘り続けたい気持ちを、今回このDAMレコードで実現する事が出来た事は、話題に乏しかったアナログディスクだけに、その真価が問われる事になるでしょう。

このDAMレコードは一作毎に、マスタリングから、メッキ、プレスに至る製盤の最新技術の導入を図り、常に限界とその可能性を求めて来た経過があります。今回も新しい試みとして、従来のアルミ芯材であるラッカー盤から、ガラス原盤を



素材としたガラスラッカーマスターを採用し、より精度の高いマスタリングを可能にしました。更にメッキ工程では、CD製造技術と設備を利用しクリーンルーム処理と従来に無い電鍍精度の改善を図り、プレスに於いては、超重量レコードの音楽再生のリニアリティーについて測定データーとヒヤリングを、イコールにするべく徹底的に理論解析した結果、一部の工程では生産性を度外視し、まったくの手作りの手段で作業が進められる場面もありました。

このように、アナログディスクへ総力を上げチャレンジした私共の制作ポリシーをきっと皆様は理解して頂けるものと思います。

それでは今回の特徴と技術データーを紹介いたしましょう。



ガラス盤の採用

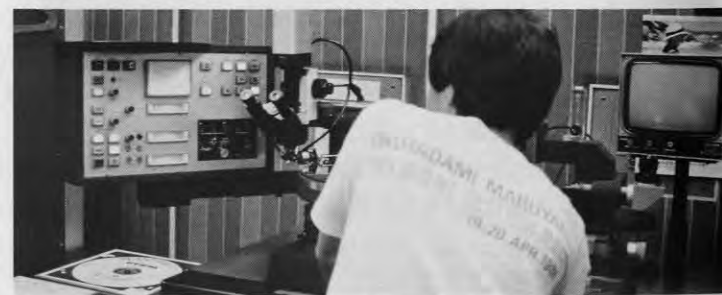
ラッカーマスターはその素材の違いにより微妙に音質へ影響し、メーカー別でトーンキャラクターがそれぞれ感じられる程、音質創りの上で重要な素材と言えます。

例えば、アルミ芯材の平滑、平面精度、ラッカー溶剤の塗布精度による、厚さ、塗りムラ、又溶剤や配合による切削性、硬さによる影響など、すべてが音質や性能に要因していると言っても過言ではありません。

今回ガラス盤を採用したのも、素材として性能の優位性を充分に確信した為です。ガラス盤面の研磨精度はアルミ材の比では無く、優れた平滑性は、当然ラッカー溶剤を塗布した後の面精度も高く、特に低周波数帯域での変調が少なく、全体に解像度が改善され楽器の音程がよりクリアになります。

アルミ材と、ガラス材の最も大きな差は、膨張率の違いにあります。(アルミ材、 $20^{\circ}\text{C} \sim 300^{\circ}\text{C}$ 2.57×10^{-5}) (ガラス材 $50^{\circ}\text{C} \sim 300^{\circ}\text{C}$ 84×10^{-7})

カッティングされたラッカー盤は、マスター原盤作成の為に常温より高い電解メッキが行われます。



DAMハイクオリティレコードについて

アナログディスクの可能性を突き詰めた、ひとつの

この若干の温度変化は、アルミ材やガラス材とラッカー塗布剤の膨張率の違いから発生するストレスが少なからず、音溝へ影響しクロストークの要因となります。

このストレスを最小限にすべく、膨張率の小さいガラス原盤を採用し、基本性能であるプリエコー、ポストエコー現象を従来のアルミラッカー盤の1/3~1/5まで改善しました。

これにより強奏部での分解能は一段と鮮明に、しかもヴァイオリンとピアノのプレゼンス効果もリアルに再現され、誠に実在感のあるサウンドが得られました。



200g 超重量レコード

ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和 (L+R)、上下振幅は、左右信号の差 (L-R) として録音カッティングされており。

DAMレコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより+5 dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝巾の変化は、 $20\mu\sim 300\mu$ (L-R) 程に達する位、高密度化しております。

この複雑な溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウやテクニックがいろいろ論じられて来た経過があります。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの個有共振によってその振動がカートリッジへリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、

レコードの個有共振はレコード重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ、共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

レコードの平面、平滑性は、ガラス盤の項で述べたように音質へ影響する重要なファクターでもあり、総括的な意味で音溝波形の成型精度に集約される訳です。

今回、アナログディスクの性能分析から、この点をターゲットとし、ビデオディスク成型の周辺技術を応用したプレス金型を新しく開発することからスタートしました。金型精度や鏡面性を上げることにより、レコード盤面のストレス(歪)を最小限に押え込み、大きな真円性の改善と、ワウフラッターの向上は、予測通りの成果が得られました。

ターンテーブルや、マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状も又少なからず、音質変化の要因と考えられます。今回の200gレコードは特に、再生条件を考慮し、今までのフラットレコード以上に精度の高いフラットプロフィールを採用致しました。このフラットネスの良さは、ターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、再生時に起り得るレコードの共振がマットを介して逆にレコードへ、フィードバックされるこのリアクションを緩和させる効果があります。

このような高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定性効果の高い安定剤の組合せにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまって極めて安定度の高い、S/N比の良いレコードを提供することが出来ました。

今回のDAMレコードで採用した製盤技術は現状の最高水準のプロセスを経て制作されております。しかし一部のセッションでは100年続いて来たアナログのベーシックな技術を基に手作りの要素もある訳で、相当なリスクを負ってまで完成させたいとする制作スタッフの熱意は、結局アナログディスクならではの魅力ではないでしょうか。

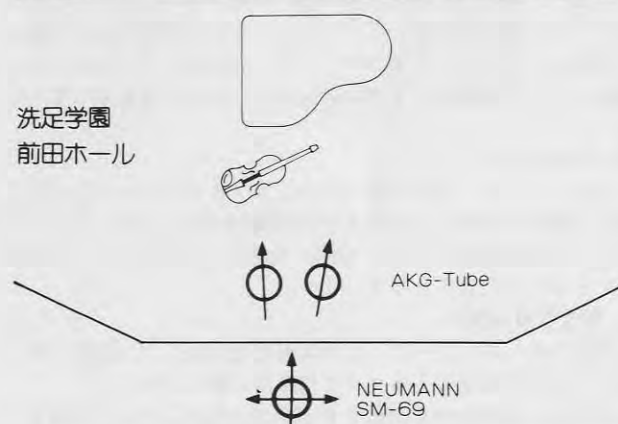
常に音の限界にチャレンジしても余り有る可能性を秘めているこのアナログディスクに拘り続けたいと思っているのは私共だけでないはずで。

このDAMレコードは可能性から言えばまだまだ満足しかねる点は残されているかも知れませんが現状のアナログディスクの市場性を考えマスプロ的判断をする限り、1つの完成領域に到達したディスクと確信致します。

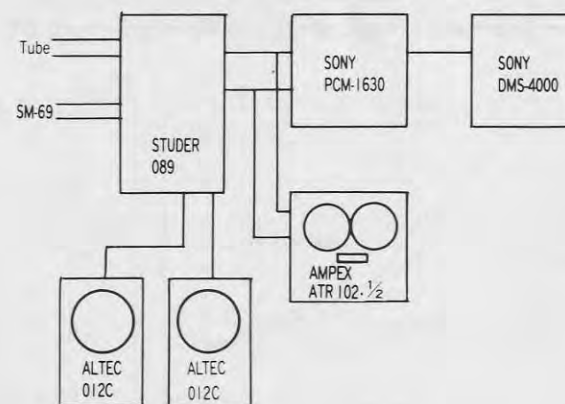
(開発技術部 原 清介)



マイク・セッティング



録音ダイアグラム



完成領域と確信します。

技術解説

今回の200gハイクオリティディスクはコンパクトディスクなどの高密度記録技術を応用し、アナログディスクとして他に類を見ない極めて優れたディスクです。

大きな特長は、隣りの音溝・反対チャンネルに与える影響が少ない事です。また、従来レコードでは難しいとされてきた、ワウフラッターが大きく改善されました。

これらにより、分解能がよく定位がしっかりした澄んだ音を実現しました。

以下ここに各項目ごとに御説明致します。

1. ノイズ

Fig. 1のスペクトラムでわかるように、レギュラーディスクに比べ、耳につく100Hz~500Hz付近のノイズをガラス芯材のラッカー盤や超重量レコードプレスなどの採用により大幅に低減し、低音から中音にかけて3~6dBのノイズレベルを低減して、分解能がよく中低音のレコードくさを消えています。

2. クロストーク

そして、Fig. 2のスペクトラムでもノイズスペクトラム同様、低音から中音にかけて3dB程度改善され、フラットディスクにより高音域でも2~3dBの改善をしているため、定位のしっかりした音となっています。

3. ワウフラッター

Fig. 3のレギュラーディスクは偏心を矯正した状態であり、この値は従来のディスクでは非常に難しい値です。

しかし、今回のハイクオリティレコードはこのような補正を加えずに0.03%以下で0.02%程度のワウフラッター値を達成しています。

Fig. 3のワウフラッタースペクトラムで特に耳につく、1Hz~5Hzの成分が大幅に減っている事がわかりいただける

と思います。これによりヴァイオリンのビブラートも従来にない澄み切った音で、特に立ち上がり・立ち下りの安定した音色は、まさしくオリジナルサウンドと言えるでしょう。

4. エコー

これは本来あってはいけないものです。しかし、ラッカー盤切削時、プレス成形時などでどうしても発生する現象です。

Fig. 4 a・bは400Hzの逆相信号に対して、プリエコーはレギュラーディスクが45dB程度に対してハイクオリティレコードは55dB程度で10dB改善です。ポストエコーでもレギュラーディスクが48dB程度に対してハイクオリティディスクは70dBと、大幅に改善されています。

5. 真円度

同一のスタンパーで比較したプレス条件によるデータ(Fig. 5)から理解できる様に、重量レコードの変位量はレギュラーディスクの1/3~1/2まで改善されています。これは、低周波成分による変調度合が少ない事を意味し、解像度はもちろん、安定性に影響している重要なファクターです。

6. High Quality Disk プロフィール

	レギュラーディスク	ハイクオリティディスク	レギュラーディスク比
重量	110g	200g	180%
録音部厚さ	1.10mm	2.15mm	195%
a - b	0.75mm	0.25mm	33%

以上のように今回のDAMレコードは現状の最高技術をもって製盤されたアナログの集大成とも言えるものと確信致します。

是非、この真価を十分に理解頂ければ幸いです。

(開発技術部 田口 庄司)

30センチ45回転レコードの 取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用出来ますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が早くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意して下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の摩耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

再生にあたって、カートリッジやアームによっては、トレースが難しい場合もあります。特に冬に向って、室温は20℃前後、針圧は、指定の範囲で重い方にセットしてください。又、曲によっては、ハイレベル・カッティングのため、一部ゴーストがありますが、御了承ください。

Fig. 1

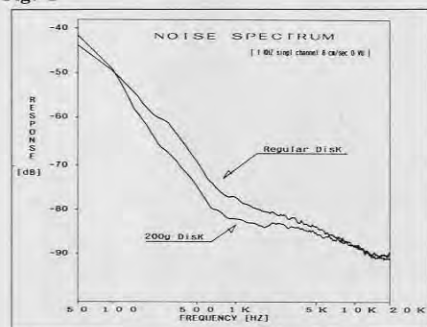


Fig. 2

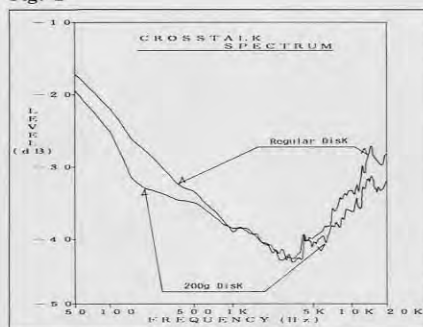


Fig. 3

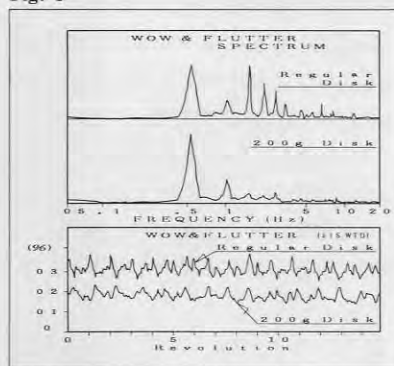


Fig. 4

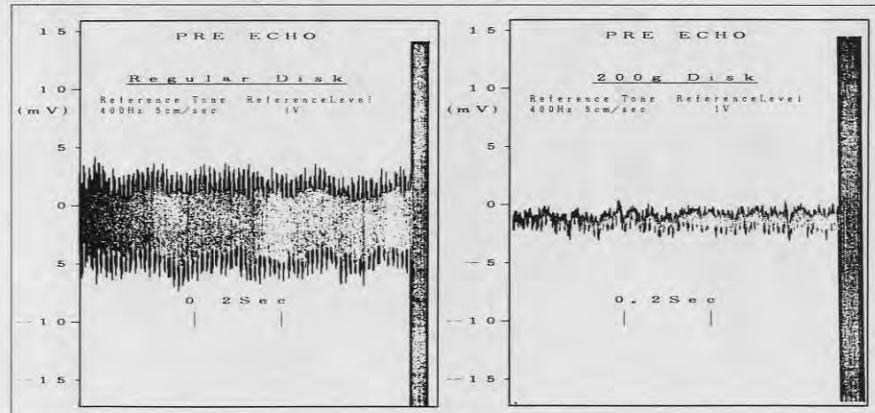
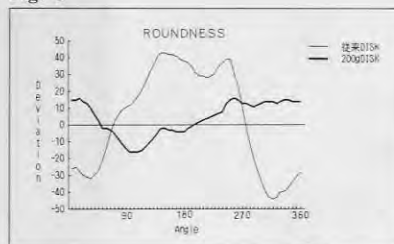


Fig. 5



カッティング・データ

Cutting Date : 21 & 22 Jan. 1987

Toshiba-EMI Akasaka

Tape Recorder : AMPEX ATR-102- $\frac{1}{2}$

Drive Amplifier : Neumann SAL-74

Cutting Lathe : Neumann VMS-80

Diamond Cutting Stylus

Cutting Head : Neumann SX-74

Non Limiter

Non Equalizer

スタッフ

総合プロデューサー 小山正敏、八田甫
プロデューサー/ディレクター 里見清司
バランス・エンジニア 池田 彰
カッティング・エンジニア 竹内昭五
ピアノ・チューナー 藤村周作
ジャケット (株)グラバー企画
フォトグラファー 伊藤 隆
制作協力 洗足学園
録音場所 洗足学園前田ホール
録音年月日 1986年8月28、29日
企画・制作 DAM推進委員会 DAMC
製造 東芝EMI株式会社